
報告者名	赤尾 智宏	被調査者生年	1941年(男)
調査者名	高倉 浩樹	被調査者属性	山元町中浜区長
補助調査者	赤尾 智宏		

話者情報

Iさんは、昭和16年(1941)に東京江東区=旧城東区で生まれた。妹の出産のために、Iさんの母の実家である坂元に帰省し、昭和20年(1945)から中浜地区の小中永窪に移り住んだ。小中永窪は、戦後の入植者によって開拓された部落である。

Iさんは、高校までを中浜で過ごし、多賀城市の多賀城セイコーに長年単身赴任した後、磐城ダイカスト工業に務めた。磐城ダイカスト工業は、アルミの部品メーカーであり、Iさんは山下の高速インター付近にある本社に勤務していた。会社は、最近トヨタとの売買も開始した。定年後の現在、Iさんは内職をしている。

Iさんの妻は福島県相馬の出身で、実家は苺農家であり、現在でも苺を栽培している。妻の父親は、馬が好きで野馬追い行事に参加していた。面接をした部屋には、Iさんの孫(現在中学2年生)が小学校3年生のときに、相馬の野馬追い行事で馬にまたがった写真が飾ってある。

Iさんの被災状況

Iさんは自宅の車庫で内職を終え、商品の納品に行こうとしたときに被災した。

Iさんには2人の孫が中浜小学校に通っていたが、Iさんの息子が中浜小学校まで迎えに行き、津波の被災を免れた。福島県沿岸最北部の新地町で働いていたIさんの息子が、孫を迎えに行った。車に乗せたら津波がきたという。黒い煙をみたという。命からがら逃げた。一方で、近隣住民の中には「うちの子がいねえ」と言い、子どもの行方を確認出来ない人もいた。震災当日、津波によって中浜小学校に取り残されてしまった児童も複数名いた。

小中永窪は、高台にあるため津波の被害を免れたが、話者宅から6号線へと通じる道路まで津波が押し寄せてきて、通路が寸断されてしまった。車で道路が通行出来るようになった後も、当時はガソリンが不足して移動するのが大変だった。

話者宅のライフラインの復旧状況は、水道は早かったが、電気、プロパンガスは時間がかかった。震災後13日に相馬にあるIさんの妻の実家で風呂を借りた。坂元に住んでいる姉の家にも風呂を借りに行った。

自宅の壁にはひびが入った箇所もあるが、住むには問題ない。

震災時のIさんの活動

震災当日に避難所であった坂元中学校で震災対策本部が立ち上げられた。当時、副区長であったIさんは、区長や役員と共に安否者の確認作業に追われた。自動車が仕えなかったため、Iさんは徒歩で避難所に通っていた。

居民に関するデータが失われ、各世帯の世帯主しかわからなかった。はじめに、世帯主に関する聞き込みから家族構成を把握した。そして、家族構成を示した表に基づいて、行政上の班単位で住民の安否確認を開始した。Iさんら避難所の役員は、役場よりも先に安否確認を開始しており、捜索にあった自衛隊と直接情報交換し、行方不明者の状況などを伝えた。作業が終了したのは、避難所が閉じる1週間前、6月の終わりから7月中旬あたりだった。

安否確認以外に避難所の交通整理も行った。雨が降るなかの交通整理は寒かった。雨も降ってぬれたので放射能

を浴びたと思う。震災時は何をやっても住民から苦情を言われ、役員手当もなかったとIさんは語る。

話者は副区長の役職を辞めることになっていたが、避難所にいる旧役員との話し合いの結果、来年の3月まで区長として務めることになった。

現在、区長の仕事として、今は山元町役場での議会情報などを伝える役場からの配布物を配っている。区費をとってはいない。

中浜地区の現況

震災前の中浜地区の人口は311世帯950人だったが、震災により135名が亡くなり、町外・県外の民間アパートに移住したことによって、2012年5月の時点で213世帯553人まで減少した。

震災後、中浜地区で自宅生活をしているのは、小中永達18世帯、新浜原5世帯の合計23世帯である。小中永達は20世帯から移住した。その家は住むのには問題なかったが、子どもが中浜小学校で被災し、当日は津波を避けるため学校の屋上で一夜を明かした。その後中山仮設に暮らしていたが、心理的影響が大きく引っ越していったという。2012年3月には、中山に44世帯、旧坂元中学校に約40世帯、町民グラウンドに21世帯の合計約110世帯が、それぞれの場所の仮設住宅で生活していた。

2011年7月20日付け返送の中浜地区居住に関するアンケートでは、60パーセントの人が「中浜に住みたい」と答えた。

移転地の候補は、坂元駅、山下駅、宮城病院付近になっている。既に決定した候補地を住民の要望に合わせてすぐに変更するのは、現状では困難である。中浜地区の住民は、行政側の流れに任せており、旗振りしてもついて来られない。

学校選択の問題などから、山元町全体で町外移転を望む人が多数いる。年配者は、新しい土地に移ることはせずに公営住宅に住むことが予測される。

津波によって流出しなかった中浜小学校をメモリアルパークにする構想があり、2013年3月11日までに付近に五輪の塔を供養（慰霊）塔として建立する予定である。135人の被害者の名前を刻む。これを行うのは丸森町の石屋さんをお願いすることにした。この人は第2回の日石展で賞をもらった人。メモリアルパークに関しては、中浜地区だけで事業を進められないので、山元町役場など関係諸機関と話し合う必要がある。

中浜地区と中浜神楽の今後について

神楽は400年の歴史という伝統があるので震災後も続けなければいけないが、どうやって継承していくのが問題である。自分自身も青年会のときにちょっとやっていたが、仕事で離れてしまった。Iさんの子どもは、神楽の経験があるが、現在は関わっていない。副会長のTKさんは、神楽保存会の継承活動に積極的である。

Iさんは、中浜神楽の継承を希望する一方で、「地域がなくての神楽は可能か？」と考えている。中浜地区が行政区として成立するのか、隣の区に吸収合併されるのか、地区の今後については見通しがたたないようでは、神楽の継承や活動自体が困難ではないかと懸念している。

5、6軒の苺の栽培をしている家を除けば、中浜地区は稲作中心の兼業農家が多く、畑作は自給目的でやっている程度である。放射能の危険があり、野菜の栽培をしている家はなく、この辺りで収穫された野菜を子ども達に食べさせていない。また、苺の栽培を再開している農家もない。地区のほとんどが勤め人であるため、中浜地区が復興し、震災前と同じように生活できるようになるためには、JRの復旧により、通勤通学の手段が確保されるかどうか問題である。磯の連合組合の会長、地権者との交渉が行われ、測量も終わり、線路が整備される場所は決まり、3年後には駅が建つのではないかとIさんは考えている。また、線路はかさ上げして、防波堤にする災害対策案も考えられている。

これからどのようにして土地の買い上げをしていくのかも問題の一つである。土地は安くしか売れず、新たに土地を買えるだけの金額にはならない。Iさんは、自宅が無事だったため、家を失った区の皆と話す時には引け目を感じる。

中浜と磯の児童が通学する中浜小学校が坂元小学校に合併された場合、坂元地区には「坂元おけさ」があるので、

神楽を伝えるのは難しくなる可能性がある。今年の運動会では、中浜子ども神楽、坂元おけさの両方が演じられた。

9月23日に坂元公民館で中浜地区での芋煮会を開くために話し合いの場を設ける。芋煮会の会場は坂元中学校で、女性が中心になって運営する予定である。芋煮会で地区の伝統である中浜神楽を披露してもらおうと思ったが、衣装や道具類が津波で流出したため、演じることはできない。また、行政区に中浜以外に磯の地域が重なり、磯の子ども達も入っているため、子ども神楽も出来ないことになった。芋煮会当日は、写真を肴に思い出話をしたいと話者は考えている。

仮設住宅ごとに行事が開かれているが、連絡が困難なため、区全体で集まることはない。連絡を取るのは、区長・副区長と民生委員の仕事である。山下地区、笠野で盆踊りを主催した人は、連絡が大変だったと言っていた。



写真1 天神社のご神体寄進に関する文書①



写真2 天神社のご神体寄進に関する文書②



写真3 天神社のご神体寄進に関する文書③